

はまなす句会（十一月九日）（百二十八回）

暮早し余生にさほど暇はなく

圭二

寄る波の碎けて白し冬はじめ

菊枝

古傷のまた傷みだす初霰

由美子

病みて知る人のやさしさ石露の花

久子

後の月更けて静寂の深まりぬ

玲子

平凡な暮らしのぞきに小鳥来る

則子

